

募集にあたって

「四里の道は長かった。その間に青縞の市の立つ羽生の町があった。田圃にはげんげが咲き、豪家の垣からは八重桜が散りこぼれた。」で始まる田山花袋の小説『田舎教師』の作中において、成願寺和尚山形古城の名で登場する太田玉茗は、明治詩壇前期において、島崎藤村や国木田独歩とともに、日本の近代詩史に名をとどめた新体詩人の一人でありました。

この太田玉茗を顕彰するとともに、詩の素晴らしさを全国のみなさまに伝え、詩を通して文化の発展の向上に寄与することができればと考え、新体詩人のふるさとの地でもある羽生市が、「ふるさと」をメインテーマに「詩」の全国募集をおこなったものです。

目次

◎ 受賞作品集

太田玉茗賞

一篇

「ひかりのうつわ」

半田信和

福井県坂井市……………6

優秀賞

五篇

「雑木林物語」

「椿と遊ぶ」

「鉄砲のように熊手を担いで」

「北本自然観察園の藤」

「森のいぶき」

浅野政枝

武村三幸

巴希多

平木たんま

ふくもりいくこ

北海道札幌市……………10

埼玉県川口市……………12

埼玉県川越市……………14

埼玉県さいたま市……………16

千葉県野田市……………18

佳作

十篇

「一本の木」

「桜を見るのは」

「青桐とおばあさん」

「Re・Born―再生―」

「林の道・幻想」

「神様の木」

「洞」

「ムクロジの木」

岩崎久美子

江端芳枝

木塚康成

清水由実

赤水由実

戸田和樹

林哲也

堀内恵子

埼玉県羽生市……………22

静岡県磐田市……………24

広島県呉市……………26

群馬県高崎市……………28

宮崎県宮崎市……………30

京都府京都市……………32

埼玉県北本市……………34

埼玉県川口市……………36

「水の流れのようだから」
「アカシアの樹下」

松風純子
水木萌子

長崎県諫早市……………38
埼玉県秩父郡小鹿野町…40

市民奨励賞 三篇

「わが家の記念樹」
「石榴の庭で」
「ふるさとの木をなぜながら」

蟹澤義久
小林伊月
蓮見直子

埼玉県羽生市……………44
埼玉県羽生市……………46
埼玉県羽生市……………48

◎ 講 評

ふるさとの木と人生

中村 稔

◎ 選考委員紹介

石原 武
新川和江

中村 稔

◎ 推薦委員紹介

菊田 守
木坂 涼

北岡 淳子

◎ 資 料

経過
募集要項
応募状況

第八回

少室山詩

太田玉茗賞

ひかりのうつわ

半田信和

ちいさなうつわが
さきはじめる

はなみずきのかたちをした
しずかなじかんがさきはじめる

ふかくきざまれたかなしみを
うけとめるにはちいさすぎるが

それでもいまをみつめ
そのさきのそらをみつめて

たくさんのひかりのうつわが
さきはじめる



第八回

・
少
百
七
・
也
の
詩

優

秀

賞

雑木林物語

浅野政枝

和寒町字北原戦後の開拓地はぬかる泥炭地
昭和三十四年二月 特別寒い節分のころ

三十四歳の父は人馬一体の労働のためか
旭川の病院で腎臓を片方取る手術でいない

晩秋に東北出身の季節労働者ナリタさんが
薪小屋を薪でいっぱいにしたが早切れた

母は毎日鶏小屋で薪を燃やし凍れた馬鈴薯と
南瓜と人参を煮て百羽の鶏の餌を作っている

卵はたったひとつの現金収入だ
キーンと快晴の朝

小さい母が跳んで道産子クロの背に鞍くらを置く
馬ソリでピヨッペ川辺の防風林へ向かう

母は馬を御し十歳の私は後ろ向き
馬ソリ跡の二本線が光ってまぶしい

どこまでも空碧く原野の果てまで白い
空中にダイヤモンドダストが無音で舞う

ブルル：フツフー クロの息も睫まつげも白い

カチャ キツチャ カツチャ キツチャ…
榎屋根木造六疊二間の家がドンドン遠くなる
母は雑木林でナナカマドの幹に手綱を巻く
吠^{かます}の中のデントコーンと燕^{えんぼく}麦をクロにやる
アカダモ ヤチダモ ラクヨウとオンコ
ヤナギにシラカバ エゾマツ トドマツなど
黒い林の所々に山葡萄絡まり熊笹が密集
ねんねこの中まだ歩けない五つの妹が眠る
母はシラカバの幹を鋸^{のこ}でギコギコギーコ
赤い顔から湯気上り木の根元を持ち
必死に叫ぶ「両手で枝をしっかり持って！」
二人で木をソリに載せ雪の中をこいで帰った
大晦日に門松切って雛祭に猫柳手折り生け
七夕の柳に短冊飾り 夏は柳で釣り竿作り
台風で納屋がつぶれて建てなおし霜が降ると
山葡萄と胡桃で空腹紛らせ 小枝で箸^{しぢ}拵えた
母は黄金のタモギダケを一房一度採った
新鮮が頭^{かぶ}の天辺から爪先まで染み渡った確実
木々と遊び木を祭り生かされ暮らしていた
灯火はランプ 水は井戸水 煮炊きは石炭か
薪ストーブ 全てスイッチボタンなど無い
ああ 何にも無いようでも在った時代よ

椿と遊ぶ

武村三幸

秋になると近所の山へ走った

椿の実を採るためだ

採った実は皮を剥がし

黒っぽい種だけを取り出す

取り出した種はコンクリートに擦りつけ

穴を開ける

母のピン留めを使い

中味の脂と薄皮を掻き出す

中味を綺麗にすると

種の穴に唇をつけて息を吹きかける

ピーという音がした

冬になると近所の山へ走った

椿の花の蜜を吸うためだ

椿の蜜は甘い

木の枝を登り

赤い満開の花卉から花粉を取除く

花卉の根元には甘い蜜がある
私達は次から次へと吸い進める
ガキ大将がもうやめると命令する
全て吸ってしまうと実がならないからだ

春から夏は

椿の実で作った笛を鳴らして遊ぶ
町内はピーピー椿笛の音で賑やかだ
私達は一年じゅう椿と遊ぶ

鉄砲のように熊手を担いで

巴 希多

めいかいの次は策
チビだったけれど
背が伸びていくにつれ
しまいには籠と
小学生のわたしが
背負う入れ物が
大きくなっていった

生家の近くに名門のゴルフ場があつて
コースは松林で区切られ
松の大樹は冬になると
黄金いろの枯れ葉を落とした

学校から帰ると鞆を放り投げ
日曜日は何度も
熊手を鉄砲のように担ぎ
ゴルフ場に松葉を掃きに行った

掃き集めた松葉を籠にギューギュー詰め
背負うと頭より高く積んだてんこ盛りに
針のような先で頭をチクチク刺されながら
夕方は一番星を従えて田んぼ道を帰った

一晩中大風が吹き荒れた朝は

松葉が敷いたように落ちているはず

我先に母も妹も掃きに行ったので

松葉は屑小屋の窓を塞いだ

屑小屋が透いてくると

自分の責任のように不安になり

いっばいだと安心していられた

石油の無い時代

松葉は火力が強く

竈かまどに焼いべる母の眼の中まなこでも赤々と燃えていた

屑小屋が空っぽになる頃

閉ざされていた窓も開き

初夏の風が部屋を通り抜けていくのだった

北本自然観察園の藤

平木 たんま

人の筋肉のようにねじれ
巻きつき求めあい重さでたわみ
地を這いからみあう灰色の蔓
幹にからみ
枝にからみ
頂きに到り空の光をあび重くゆれる

あるものは空間を直にあがり
木を縛り傾ける
裸の蔓の塊をてのひらで押すと
押されるままに逆らわず
からまる蔓はつぎつぎにゆれ
大木の高きを抱いた蔓にとどく
少しも動かぬ大木の幹
蔓はそのままゆれもどり
ぎこちなく元にもどる
目のない生きものが

なにもものかになろうとしてなりそこない
藤の幹でいる

地上の

笹や棕櫚や赤い実をつけたシロダモが風に鳴り
かつて薄紫の花房が高く低く
二人をおおうのを見上げた
かの人の声が聞こえる

森のいぶき

ふくもり
いくい

丸いふくらみのある幼児用の椅子
緑色のふちがすり減って木肌がのぞき
脚の方から木に戻っていく

どこの森だったのだろうか
遠い日のそよぎの中で
一本の木を見る目があった
選ばれ 切り出され 運ばれて
腕のたつ大工に出会った

幾つもの確かな目にひきつがれ
柔らかな丸みをもつ幼児用の椅子が
深い緑の森から生まれたのだろうか
田舎の家具店で
夢のように置かれていたという

反対を押しきって都会に出た若い家庭へ

その椅子は届けられた
その椅子はいのちを乗せる役をひき受けた
受け継ぐいのちの連なりを
抱えてはあやし 贈り主のもとへ
にぎやかな笑顔を届ける
次々と育てあげ
その子たちのまた子供たちも乗せた
今は老いた猫のまるい夢を乗せている

木が育つように人は育ち
育んでくれた人たちはもういない
ふるさとの森のいぶきだけが残っている

第八回

・
心
算
七
也
詩

佳

作

一本の木

岩 寄 久美子

家は何本の柱を組み合わせて

出来ているのだろうか：

一本の柱は一本の木から作られる

一本の木は 北から南から

大切に育てられ外国からも輸入して

製材され 家づくりの柱に

生まれ変わる

大勢の技術者のやさしい心と腕で

仕上げられ 大工さんに託される

上棟式になると

家の骨組として何本もの柱が

積みあげられて祝いに来た職人さんに

よって組立てられる

私の家は築二十九年目の平屋ですが

あと何年暮らせるのでしょうか

祖父は大工の棟梁で十二代目

もう祖父の建てた家は

残っていないだろう

百年以上経っているから：

伯父は努力して東京の学校で学び

建築設計士となり独立をした

日本の家は一戸建てが望ましいが

今は少し地震等でむつかしそうだ

家のあかりは「家族」という

構成の中で喜びや悲しみを分かちあい

愛が生まれ生きて行く

一本の木も柱も人のしあわせを

守る大切な木である

桜を見るのは

江端芳枝

祖父は小学生の私に
木の見方を教えた

桜を見るのは

春浅い日

桜の木の下に入って見る

幹に巻きついたつるの樹皮かわに触ってみる

一つ二つ咲いた花の萼の色を見る

花びらも見ると

その上の空を見上げる

樺を見るのは

冬真っ只中

樺の木の下に入って見る

幹の冷たさを確かめる

枝をゆっくり見上げる

枝と枝の間の空を見上げる

銀杏を見るのは

秋の真ん中

銀杏の木の下に入って見る

古い枝に垂れ下がった銀杏のおちちを見る

びっしりと葉が重なっていてなかなか見えない空を

何とかしてのぞく

祖父と一緒に桜や榉や銀杏の木の下に入ると

幹を見る前に

祖父のお腹が見えてしまった

おかしくてたまらなかった

祖父がいなくなった後

私はひとりで

桜と榉と銀杏の木の下に入り

木を見るふりをして

祖父の

お腹と顔を思い出している

青桐とおばあさん

木塚康成

公園は
陽炎に揺らいでいました
アブラゼミは
じりじり鳴いて
首筋に汗が流れます
水筒をタスキにかけ
ノートを開いた
ぼくたちは
青桐の木陰に集まりました
みんなの中心には
片足のないおばあさんがいました
爆心地から1300メートルの通信局で
青桐とおばあさんは被爆しました
焼けただれた青桐は
その後蘇りましたが
おばあさんは建物の下敷きになり
麻酔なしで足を切断するという

惨たらしいことになったのです

きつと何百回も話して

そのたびに心が痛んだことでしょう

おばあさんは遠い日のことを

昨日のこのように

不自由な身体で語りました

青桐の種はあちこちに蒔かれ

木立になりました

その木陰でおばあさんは語り

公園を訪れる子供たちは

静かに聞き入っています

まわりにいた鳩がおばあさんの方へ

ぱつと飛び去りました

みんな汗と涙が区別できなくなりました

今年7月おばあさんは亡くなりました

秋の終わり ぼくは

青桐の落ち葉を踏んで

おばあさんの場所に立ちました

日溜まりのように暖かいその場所に

Re・Born―再生―

清水由実

かつて実家の庭に

白木蓮の木はあった

太い幹 なめらかな曲線の大きめの花びら

空に向ってシュッと陽光を仰いでいた

―花木はよくわからないがこれは潔い―

父は言った

白木蓮が咲いている

あでやかだ 存在が濃い

精一杯 声を発している

散りゆく頃 眩かった白さはくすみ

萎れ 風に揺らぎ

大地の色に紛れてしまう

脳幹梗塞で倒れ 二年余りの闘病のあと

父は逝った

まばたきだけが 唯一の意思表示だった
「はい」は一回 「いいえ」は二回
十数年前のことになる
父の後を追うように 母も逝った
新盆の時 母の祭壇が隣に据えられた

住み人の居なくなつた家は暫く
ひっそりと佇んでいた
庭の手入れを頼んだ植木職人が
何を勘違いしたのか
白木蓮をスツパリ切り幹は半分になつた
―じいじの好きな木だつたのに―
息子がポツリと呟いた

ある日草むしりに行くと
水平に切つた幹の表面から
か細い新芽が 息づいている
命が また始まつたと思つた
父が 還つてきたと思つた
居ないけれど在ることに 胸がうごいた

林の道・幻想

赤

永

母よ
わたしには
ふるさとが見えません
幼ない頃
あなたの手に引かれて
林の道を歩いた記憶があります
小さい風が舞って
落ち葉が わたしを誘って
あなたの手の温もりだけが
心を揺らしていました
あれが
ふるさとだったのでしょうか
あなたは
五十歳という若さで
わたしの知らない界くにに
逝きました

ですから
わたしには
ふるさとが見えません

いま

わたしは

あなたの五十歳をはるかに越えて
ふるさとを捜しています

どこにあるのでしょうか

わたしの

ふるすとは

あの林の道だったのでしょうか
小さな風だったのでしょうか

神様の木

戸田和樹

八剣神社の境内
それは天にも届くほどの大楠だった
伊勢湾台風の時も唯一倒れずに残った木だ
注連縄を巻かれたその風体は
まるで大相撲の横綱
空を覆い尽くすほどの枝々には
青々と木の葉を茂らせ
そのはるか上空を
アオスジアゲハはユラリと飛んだ
昆虫採集のたもを持ったぼくは
妬ましくそれを見上げたものだ
ぼくがその木を登る白蛇を見たのは
いつの日のことだったろう
二メートルはあろうかというその蛇は
身体をくねらせ
大楠の幹にある洞むらに入り込んだ

そのことを父に話すと

おまえは神様を見たのだ

やたらにその話をするものじゃない

と窘められた

人に話さなければ

いつかお前に幸運が訪れる

そうも言って笑った

神様の木というのは

ぼくが勝手につけた名前だ

村祭りの暮れ方

御輿を担いだ馬を送って社を抜ける時

大楠は真っ黒な両手を広げて

ぼくの背中を触った

けっして白蛇のことは話しません

ぼくは大楠を振り返った

その時 シャンシャンシャン と

馬の背の御輿の鈴がなったようなその音は

風にざわめく大楠の葉擦れの音だったか

それから五十年経った今でも

その音が心の中で鳴る時がある

洞^{うろ}

林
哲
也

里を見わたす巨木の
根方のうろで
蟋蟀がなっています
この世のものとおもえぬ
澄んだ音色でなっています

神が宿る樹の
くらがりの
雨も風もとどかない　そこが
どれほどこちよいところか
どれほどさびしいところか
だれも知らない

そのおくの闇が
どこまでふかいのか
そこに里の四季はめぐっているのか
わたしには見えない　けれど

翅をふるわせ

しきりにうごかすながい触角で
人影がめつきりすくない今の里を
さぐっているようすが目にうかぶのです

音色にひめた

里をいとおしむひびきは

二百年の獅子踊りの笛の音のように

この土に生きた人びとの

ぬくもりといっしょに

胸にしみこんでくるのです

蟋蟀が

澄んだ音色でなっています

ムクロジの木

堀内恵子

橋を渡ると駄菓子屋があった
木枠に硝子をはめ込んだ引き戸が二枚見え
それ以外は木に囲まれていた
十円玉を握りしめた子どもたちが
四、五人集まって店に行く
引き戸がガタガタと音を立てて移動する
最後の子が土間の店内に入ったころ
奥の障子が開いておばあさんの顔が見える
背の低い丸顔のおばあさん

あの子どもたちが成人になったころ
引き戸の外に一日中 年中雨戸が閉まった
駄菓子屋を囲んでいた木々は
何年たっても生き生きとしていたが
おばあさんの店の雨戸は逆に
剥がれる所も出て壊れる方に向かって行った

数年後 川の整備開発が始まった

おばあさんの店は解体された

木々も伐採されて一本だけ残された

遊歩道が出来て端っこに

一本だけ残ったムクロジの木

一本になると今まで以上に木は高く感じた

ムクロジの木は毎年 実を落としていた

大きめの目立つ実は拾われて

鉢に蒔かれる事もあった

数年後 橋の架け替え工事が始まった

あの一本のムクロジも伐採が決まった

ムクロジの種は近くの小学校で芽を出した

あの木の子どもは

いつまでも大切に守られるだろう

上流の岸に誰が蒔いたのか

左右に葉を並べる特徴のムクロジの木が育つ

私の畑の二本のすらりと伸びた巨木

小学校の木よりも 上流の木よりも年上の

あのムクロジの木の子ども

水の流れのようだから

松風純子

テーブルを囲んで

法律上の父となる人に

「息子の給料でやっていけるか？」
と聞かれた

「もちろんです」

と言わせるための質問だ

意図された答えを発してあげる常識と

それを少々覆してみたい遊び心を

持ち合わせている私は

「もちろんです。」

「いただいた金額の内ですりくりできます」
と答えた

すると

目の前に座る法律上の母となる人が

「どうせこの人は

たいした給料じゃなかっただろうからね」

と。

私は目の前にいるのだから
それを聞くなら

「あなたはいくらもらっていたの？」
の方がいい。

夫となる人は私の右隣で蜜柑を食べている
テーブルに目を落とした

テーブルの木目は水の流れのようだった
流せ、流せ
唇噛んだ

あれから
何度唇噛んだだろう

何度この木目を見ただろう
流せ、流せ

ふるさととなった場所の木

アカシアの樹下

水木萌子

女子高から共学に
校名も変わってしまった母校
それでも校庭に立つアカシアの樹は
あの時のまま

私たち文芸部員は顧問だった先生の提案で
外に出て短歌を創ることになった
出来た作品は 作者を伏せ
黒板に書いて 皆で批評し合った
私はその歌が気になって仕方が無かったので

青白く詠むなんて病人のよう
尽くる灯火も命が尽きるようで
この新緑の季節にはそぐわない
と
何も知らないまま 痛烈に

取り上げられた歌の作者は
名乗り出なければならぬ

先生は 苦笑しながら
確かにこの季節には合わないが
今の気持ち素直に表しただけ
と
いつも落ち着き払った先生が
初めて見せた 戸惑いの表情

その半年後

先生はガンで亡くなられた
葬儀の日 先生の遺影のそばに
あの短歌の色紙が置かれていた
「青白くアカシアの樹下にて歌を詠む
尽くる灯火の証しとばかりに」

そこには私の批評など足元にも及ばない
深遠なる想いが刻まれていた
ろうそくの灯し火のような限りある命
だからこそ生きている証しを歌に託そうと

託された言葉は命を宿し 育まれて
今も生きつづけている
青空に映える白い花をまた咲かせるだろう
このアカシアの樹とともに

第八回

・
分
百
七
十
七
の
詩

市民奨励賞

わが家の記念樹

蟹澤義久

四十年前ヨーグルトを造るために
工場を設けた羽生市に移り住んだ
家を新築した時に縁起がよい木と聞き
植えた記念樹は金木犀
生命力は旺盛で深い緑の葉を繁らせる

神無月に入った途端に一斉に咲きだす
オレンジ色の十字の小さな花房
ぱっと開く花卉の中に二つの目が秋を見つめる
近所の家々でも新築した時に植えられ
町内はあたかも香りの谷間となる

かつてフランスの香料会社を視察した折り
世界から集めた香りの原料木の中に
日本からは唯一金木犀の沢山の小枝が
香料の記念樹として展示され
世界の香木の仲間入りをしていた

近くの公園の入り口にも聳える金木犀
菊月に入ると芳香の輪が扉を開き
人々を呼び集め皆の心を繋いでくれる
はぐれ雲がゆつくりと流れ
老いも若きも夕日を浴びてウオーキング

金木犀はまたわが人生祝福の記念樹だ
五年前私の金婚式に友達が贈ってくれた
二番目の我が家の記念樹
威勢よくすでに一丈余に成長した
未来を見つめダイヤモンド婚を待っていて

石榴の庭で

小林伊月

いま笑ったでしょ
まさか
笑ったよね
ミノムシみたいだなんて
でも、妻は手を上げない
大振り厚手のセーターに毛糸キャップ
風よけオーバーできっちり包み
それでも着痩せしている悲しさ
外泊許可をもらって
家の小さな庭に寝転ぶ
防水シートとマットレスを敷いた
葉を散らせた石榴の木の根元
仰向けにした妻に、毛布を掛ける
二人で並ぶと
お化けミノムシの床入りが完成
少し風があるね
片手で妻の手を握る

ミトン越しのささやかな体温
闇に伸ばした片手、指の隙間
石榴の枝の編み目のむこう、青黒い天蓋の下
オリオン座を貼付けた十一月の夜空
獅子座流星群
あ、いま光った
ほらまた、見た？
まばたき禁止
はしゃいでいたのに
やがて静かになる
けれど飽かずに、夜空を見つめる気配
気まぐれに、忘れずに流れる、冷たい光
こちらからは見えても
あちらからは見えない
おい
懐中電灯の光条を真上に向けて
石榴の枝の優しい覆いをつらぬいて
光の軌跡で小さな円を描いてみる
気付いてくれればいいのにな
気付いてくれたらいいのにな

ふるさとの木をなぜながら

蓮見直子

久しぶりに実家に行った
目の前の公園は私の庭
その中で一番大きな木は
私のお気に入りの場所だった

母にお転婆と言われながらも
よく登っていた

かくれんぼ

早登り競争

暑い夏の日も木陰で本を読んだ

ロープをかけてブランコをしたことも

猫のミーと昼寝をしたこともあった

一番好きだったのは

父が帰って来るのを見計らって

木の上から驚かせること

——後で聞いたら

本当は丸見えだったとか：
目をつぶると
大げさに驚いた父の顔！
私も小学生にタイムスリップだ
自然と口元がゆるむ：

——でもその父はもういないのだ
思い出の木も防犯上の理由で
バッサリと切られてしまった

私は小さくなってしまった
ふるさとの木をなぜながら
元気でやさしかった父を
そばに感じた

講

評

中
村

稔

ふるさとの木と人生

中村 稔

優秀作として六篇を選び、その中から太田玉茗賞一篇を選ぶ段階になって、「ひかりのうつつわ」を推すか、「鉄砲のように熊手を担いで」を推すか、選考委員としては非常に迷い、討論もかさねた。この二つの作品は対照的といつてよい。「ひかりのうつつわ」は全篇平仮名、一字の漢字も用いることなく、はなみずきの生態を典雅に抒情的にうたいあげている。「鉄砲のように熊手を担いで」は火力として使う松葉を集めた少女時代を回想した、生活感、現実感のあふれた作品である。「ひかりのうつつわ」は気品があるが、生活感、現実感が稀薄だし、「鉄砲のように熊手を担いで」は生活感、現実感が読者の胸に迫るのだが、作品として荒削りの感がある。そういう意味で、いずれも一長一短だが、「ひかりのうつつわ」の完成度の高さと、「鉄砲のように熊手を担いで」では松葉を題材とし、松という「ふるさとの木」そのものをとりあげていない弱点を考慮して、「ひかりのうつつわ」を太田玉茗賞にふさわしいという結論に達したのであった。

「雑木林物語」はその末行に「ああ 何にも無いようでも在った時代よ」とあるように、北海道の開拓地の原野の雑木林の中の生活が展開する充実した生活、不自由でありながら心の豊かな生活をうたっていることに注目した。

「椿と遊ぶ」は作者にとつて懐かしい思い出かもしれないが、少なくとも選者の一人である私には、その意外性に惹かれた。私は椿の蜜が甘いことも、椿の実で作った笛を鳴らすことも、まったく知らない幼年時代を過した。おそらくこの詩の世界は多くの読者にとつても知られていないだろう。こうした題材を「ふるさとの木」という素材の中から発見したことに作者の創意がある。

「北本自然観察園の藤」は熟達した詩作法による手だれの作品であり、技巧的には応募作品中随一といつてよい

かもしれない。たとえば第一連の「人の筋肉のよにねじれ／巻きつき求めあい重さでたわみ／地を這いからみあう灰色の蔓／幹にからみ／枝にからみ／頂きに到り空の光をあび重くゆれる」の如き執拗に対象を凝視し、的確に藤の生態を描写した手腕は非凡というほかない。ただ、こうした藤の生態を描いて、作者が何を読者に訴えようとしていたのか、必ずしもはっきりしていなかった。末尾二行に推敲の跡がみられるが、作者としても、どのようこの詩を完結させるか、迷ったのであろう。その弱点のために優秀作の域を出ないと選考委員は判断したのであった。

「森のいぶき」は、森の中の一本の木が切り出され、幼児用の椅子に加工され、親族の反対を押しきって都会に出てきた若い夫婦の営む家庭に届けられる。「木が育つように人は育ち／育んでくれた人たちはもういない／ふるさとの森のいぶきだけが残っている」とこの詩は結ばれている。作者は若夫婦の家庭に届いた椅子が、代々うけつがれ、「森のいぶき」をつたえていることに注目する。ここにあるのは作者の森に対する、自然に対する眼のやさしさであり、椅子に注がれる眼のやさしさである。そういう意味でこれは優秀作にふさわしい作品であった。

以下は佳作として選ばれた作品について選考委員として感想を記す。佳作十篇を選んだが、これらに近い水準の作品は他に五篇ないし十篇存在した。その程度に応募作品の水準が高かったのだと言つてよい。

「一本の木」は題材において「森のいぶき」と似ている。ここでは一本の木は「一本の柱」となる。「一本の木も柱も人のしあわせを／守る大切な木である」と作者はいう。そうにちがいないのだが、「森のいぶき」の作者の眼のやさしさと比較して、詩としてふくらみに欠けている、という感があつた。

「神様の木」は大楠の洞に入った少年時の冒険の記憶をさかのぼって懐旧の気持に読者を誘う作品である。

「青桐とおばあさん」は原爆で被爆した青桐とおばあさんの後日譚である。青桐は木立になり、おばあさんは足を切断した。青桐の木立で語っていたおばあさんは今年亡くなって、おばあさんが語っていた場所は日溜りが暖かい。痛切だが心あたたまる詩である。

「ムクロジの木」はおばあさんの駄菓子屋を囲んで数本のムクロジの木があつた。おばあさんの店も解体され、最後まで残った一本も伐採された。しかし、ムクロジの木の苗は私の畑の二本の巨木となって育っている。懐かしい風景を描き、自然がうけついでいく生命に希望を託した作品と思われる。

「洞」も詩はどう書くかを知っている作者の作品である。巨木の根方のうろでなく蟋蟀の澄んだ音色が、この土に生きた人々のぬくもりとともに胸にしみこむ、とうたっている。しみじみと心に沁みる作品である。

「桜を見るのは」は祖父と共に桜、榉、銀杏などを見た思い出を記し、祖父を偲んだ思慕が心をうつ作品である。「アカシアの樹下」はガンで亡くなった文芸部の顧問の先生の短歌を中心に、アカシアの樹にかさねあわせた青春回顧の哀しく美しい詩である。

「水の流れのようだから」は嫁である作者の姑との確執を、「テーブルの木目は水の流れのようだった」とテーブルに目を落として唇を噛んだ思い出をめぐって、描きだした作品である。こうした確執は多くの日本の嫁が体験してきた事実であった。

「Re・Bornー再生ー」は亡父が愛した白木蓮が幹半分に分かれてしまったのに、その幹から新芽が息づいているのに気づき、父が還ってきたと思う、感慨を書いた作品である。ふるさとの木はいつも人生の感慨と結びついていることを考えさせられる作品である。

「林の道・幻想」は落葉の舞う林の道を五十歳という若さで死去した母と共に歩いた、その母の手のぬくもりがふるさどだったのか、と問いかけている。母親への追慕とふるさとを求める心情をかさねた、感銘ふかい詩である。以下は市民奨励賞三篇についての選考委員の感想である。

「ふるさとの木をなぜながら」は木登りをして遊んだ小学生のころ、帰宅する父親を驚いて見せたが、じつは気づいていたのだった。木も伐採され、父も他界し、作者は父を偲ぶ。切られてしまった木を何故なせることができなのか、難があるが、追憶が切実である。

「わが家の記念樹」は四十年前前に羽生に移り住み、五年前に金婚式を祝い、ダイヤモンド婚も近い作者が家の新築のとき記念に植えた金木犀に寄せた思いの素材さが心をうつ。

「石榴の庭で」は外泊許可をもらった妻と二人、石榴の庭に星空を寝ころんで見る。やさしくいたわる夫婦愛の作である。

選考委員紹介

石原 武（いしはら たけし）

昭和五年（一九三〇年）八月三日生

山梨県甲府市出身

詩集に『軍港』（第一回横浜詩人会賞受賞）、『離れ象』（日本詩人クラブ賞受賞）、『夕暮れの神』（埼玉文芸賞受賞）、『これからしばらくの夜』、『飛蝗記』（第四回現代ポイエーシス賞受賞）、日本現代詩文庫『石原武詩集』ほか。評論集に『詩の原郷』、『遠いうた』、『遠いうた拾遺集』（第七回日本詩人クラブ詩界賞受賞）、エッセイ集に『君を夏の一日に譬えようか』ほか、訳書に『ケネヌ・パッチェン詩集』、『手で育てられた少年』など多数。

元日本詩人クラブ会長、埼玉詩人会会長、文教大学名誉教授。

埼玉県越谷市在住

新川 和江（しんかわ かずえ）

昭和四年（一九二九年）四月二十二日生

茨城県結城市出身

県立結城高女在学中より、詩人の西条八十に師事。詩集に『ローマの秋・その他』（第五回室生犀星詩人賞受賞）、『比喩でなく』、『土へのオード13』、『火へのオード18』、『水へのオード16』、『ひきわり麦抄』（第五回現代詩人賞受賞）、『けさの陽に』（第十三回詩歌文学館賞受賞）、『新川和江全詩集』、『記憶する水』などのほか多数の少年少女詩集がある。エッセイ集に『朝ごとに生まれよ、私』、『わたしは、此処』、『詩が生まれるとき』などがある。

その他、小学館文学賞、日本童謡賞、丸山豊記念現代詩賞、藤村記念歷程賞、丸山薫賞、現代詩花椿賞など多くの賞を受賞している。

日本ペンクラブ、日本文藝家協会会員。元日本現代詩人会会長（現名誉会員）、結城市名誉市民、ゆうき図書館名誉館長。

東京都世田谷区在住

中村 稔（なかむら ゐのる）

昭和二年（一九二七年）一月十七日生

埼玉県さいたま市出身

旧制一高を経て、一九五〇年東京大学法学部卒業。一九五二年弁護士登録、現在に至るまで弁護士を業とする。旧制一高在学時から詩作を始め、一九五〇年処女詩集『無言歌』を刊行。その後、詩集に『鵜原抄』（高村光太郎賞受賞）、『羽虫の飛ぶ風景』（読売文学賞受賞）、『中村稔詩集一九四四—一九八六』（芸術選奨文部大臣賞受賞）、『浮泛漂蕩』（藤村記念歴程賞受賞）、『新輯幻花抄』等がある。その他、中原中也全集の編集に関与、『中原中也私論』、『宮澤賢治』等の評論、『故園逍遙』、『日の匂い』等の随筆、『束の間の幻影—銅版画家駒井哲郎の生涯』（読売文学賞受賞）の評伝などがある。

井上靖文化賞、毎日芸術賞、朝日賞など多くの賞を受賞している。

日本近代文学館名誉館長、全国文学館協議会会長、日本芸術院会員、文化功労者。

埼玉県さいたま市在住

推薦委員紹介

菊田 守（きくた まもる）

昭和十年（一九三五年）七月十四日生

東京都中野区出身

学生時代に安西冬樹の「春」に心動かされ、詩を書き始める。詩誌「花」、「鳥」同人。平成六年（一九九四年）十一月、愛知県豊橋市制定の第一回丸山薫賞を詩集『かなかな』（花神社刊）により受賞。著作として他に詩集『妙正寺川』、『白鷺』、『仰向け』、『一本のつゆくさ』、『天の虫』、新・日本現代詩文庫『新編 菊田守詩集』等、エッセイ文庫『夕焼けと自転車』など多数。

元日本現代詩人会会長、日氏賞代表、丸山薫賞選考委員、前橋「若い芽のポエム」選考委員、日本文芸家協会会員、日本ペンクラブ会員、日本現代詩人会理事。

東京都中野区在住

木坂 涼（きさか りょう）

昭和三十三年（一九五八年）七月三十日生

埼玉県東松山市出身

新鮮でユニークな作風が注目を浴び、詩集に『ツツツツと』（現代詩花椿賞）、『金色の網』（芸術選奨文部大臣新人賞・埼玉文芸賞）、『ひつじがいつぴき』、『どこへ』、『ある日』、『音の箱舟モーツァルト』ほか。

エッセイ集に『消極性という積極性』、翻訳絵本『ワイズ・ブラウンの詩の絵本』など多数。

日本文藝家協会会員。

東京都板橋区在住

北岡 淳子（きたおか じゅんこ）

昭和二十二年（一九四七年）一月三日生

長野県長野市出身

現在の所属は、日本詩人クラブ（元理事長）、日本現代詩人会、日本ペンクラブ、日本文藝家協会、埼玉詩人会他。詩誌は、「白亜紀」、「ERA」、「同時代」ほかに参加。詩集『冬の蝶』（詩集収録作品より、三善晃氏作曲女性合唱曲集「街路灯」）『水または鳥』、『生姜湯』（日本詩人クラブ新人賞受賞）、『サンジュアンの木』（埼玉詩人賞受賞）『アンブロシア』、『鳥まばたけば』（日本詩人クラブ賞受賞）他がある。

埼玉県入間郡毛呂山町在住

資 料

経過

実行委員会 募集企画の決定（平成二十三年六月）

第八回「ふるさとの詩」の募集題材は、「木」（または「樹」とし、全国募集を行うことを決定した。

募集要項・啓発方法の検討（平成二十三年九月）

募集開始（平成二十三年十一月）

全国の図書館、文学館および詩人団体・マスコミ等へ募集要項を送付し、啓発を依頼した。また、公募雑誌への掲載、市のホームページへの掲載により、啓発に努めた。

募集締切（平成二十四年一月三十一日）

推薦委員会（平成二十四年三月十一日）

あらかじめ配布した応募作品の中から、各推薦委員が優秀作品を選考して持ち寄り、推薦委員会を開催した。

審査の結果七百七十四篇の中から八十一篇を、市民奨励賞対象作品十八篇から八篇を推薦選考した。

選考委員会（平成二十四年四月十四日）

あらかじめ配布した推薦作品の中から、各選考委員が優秀作品を選考して持ち寄り、選考委員会を開催した。

審査の結果太田玉茗賞一篇、優秀賞五篇、佳作十篇、市民奨励賞三篇の合計十九篇を入賞作品として決定した。

入賞者発表（平成二十四年四月二十七日）

定例記者会見において、入賞者を報道機関へ発表した。

表彰式（平成二十四年五月二十七日）

入賞者、選考委員並びに推薦委員の先生、そして関係者の方々にお集まりいただき、表彰式を開催した。

第八回 ふるさとの詩

募集要項

心に描くあなたのふるさとの「木」を一篇の詩にして応募してみませんか。

募集作品 ・ふるさとの「木」(または「樹」)を題材とした未発表のオリジナル作品。
・作品数は一人1篇とします。

応募方法 ・市販の400字詰め原稿用紙B4縦書。本文・表題で2枚以内の作品。
(パソコン等のものは原稿用紙マスごとに印字してください)
・別紙に郵便番号・住所・氏名・年齢・性別・電話番号を明記してください。
なお、ペンネーム使用の場合は、本名も書き添えてください。
氏名には必ずふりがなをつけてください。
・選考結果通知のため、住所・氏名を記入し、80円切手を貼付した返信用封筒を必ず原稿と一緒に送ってください。

応募資格 ・資格は問いません。ただし、中学生以下の方は除きます。

締切 平成24年1月31日(当日消印有効)

選考委員 新川和江・中村稔・石原武

推薦委員 新井豊美・菊田守・木坂涼・北岡淳子

発表 平成24年4月に通知

賞 ○太田玉若賞…(1篇) 賞状・盾・賞金20万円
○優秀賞…(5篇) 賞状・盾
○佳作…(10篇) 賞状・盾
○市民奨励賞…(3篇) 賞状・盾

その他 ・入賞作品の著作権は主催者に帰属し、作品は返却いたしません。
・二重応募はご遠慮ください。
・選考に関する問い合わせには応じられません。

主催 羽生市

応募・問い合わせ

〒348-8601 埼玉県羽生市東6丁目15番地
羽生市役所秘書広報課内『ふるさとの詩』募集実行委員会事務局
TEL 048(561)1121(内線204) FAX 048(562)3500
<http://www.city.hanyu.lg.jp/> E-mail: hissho@city.hanyu.lg.jp



第八回「ふるさとの詩」応募状況

1 男女別 / 年代別 [単位:人]

年代	男	女	計
10代	22	91	113
20代	17	38	55
30代	29	46	75
40代	33	57	90
50代	72	70	142
60代	73	72	145
70代	56	37	93
80代	30	13	43
90代	1	-	1
不明	7	10	17
小計	340	434	774
総計			774

※最高年齢 90歳、最少年齢 15歳

2 都道府県別 [単位:人]

県	人数	県	人数	県	人数	県	人数
北海道	21	東京都	81	京都府	18	高知県	5
青森県	5	神奈川県	42	大阪府	35	福岡県	22
岩手県	9	新潟県	18	兵庫県	17	佐賀県	3
宮城県	14	富山県	3	奈良県	3	長崎県	4
秋田県	3	石川県	8	和歌山県	3	熊本県	3
山形県	3	福井県	7	鳥取県	9	大分県	6
福島県	11	山梨県	8	島根県	1	宮崎県	5
茨城県	17	長野県	15	岡山県	4	鹿児島	7
栃木県	15	岐阜県	11	広島県	20	沖縄県	5
群馬県	8	静岡県	19	山口県	8	カナダ	1
埼玉県	188	愛知県	29	徳島県	3	ケニヤ	1
(うち羽生市18)		三重県	12	香川県	4		
千葉県	29	滋賀県	7	愛媛県	4		
						合計	774

実 行 委 員 (五十音順)

塩田 禎子

萩原 澄江

原山 喜亥

平野 文子

宮内 芳子

矢辺 竹雄

第八回 ふるさとの詩 受賞作品集

発行 平成24年5月27日

編集 ふるさとの詩 実行委員会

発行者 羽 生 市

埼玉県羽生市東6丁目15番地

TEL 048-561-1121(代)
